Osaka University Knowledge Archive

Title	The Function of Storytelling in Shakespeare's Romance Plays
Author(s)	三浦, 誉史加
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45702
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【20】

氏　　名	三　浦　誉史加（みうら　よしか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９１３２　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科英文学専攻
学　位　論　文　名	The Function of Storytelling in Shakespeare's Romance Plays （シェイクスピア・ロマンス劇における語りの機能）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　玉井　　暲 （副査） 教　授　森岡　裕一　　助教授　服部　典之　　助教授　片渕　悦久

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、シェイクスピア（1564－1616）のロマンス劇において「語り」が顕著に見られる事実に注目し、この語りが各劇作品の解釈を左右する大きな機能を果たしていることを検証し、さらにロマンス劇におけるこの語りの変化・変遷のありようとその意味を考察した研究である。論文は、英語で書かれ、その全体は序論、５つの章、結論から構成され、本論、図表、注、参考文献を含めて、A４判で計 166 ページから成っている。

序論では、本論において取り上げる作品として『ペリクリーズ』、『冬物語』、『テンペスト』、『シンベリン』、『二人の貴公子』、『終わりよければすべてよし』を挙げ、その劇空間に現れる語りについての輪郭を述べる。続く第一章では、『ペリクリーズ』を取り上げ、この劇に登場する中世詩人ガワーが観客に向かって働きかける語りの機能を考察する。ペリクリーズが劇中でのアクションにおいて見せる無力な政治家としての像とガワーがペリクリーズを賞賛する語りによって作られる像とのあいだで一種のギャップが生じることを述べたあと、このギャップによってもたらされた葛藤は、観客の前で演じられる劇行為によるのではなく、じつはガワーやその他の人物による出来事についての報告・語りによって消滅されるものであることを明らかにする。この劇では、語りがこうした対立・葛藤を解消する力をもっているにしても、二つのペリクリーズ像のあいだのギャップが同時に語りの正当性への疑問を喚起する働きをしていることをも指摘し、ここに語りの孕む「治癒力」とその否定的力との両面を指摘する。第二章は、『冬物語』がこの語りの治癒力を積極的に行使する劇であることを検証する。王リオンティーズと娘パーディタの再会は、直接観客の前で演じられることがなくて、過去に起こった出来事のひとつとして語りの中で報告されることにより、これらの登場人物たちは他者からの攻撃を回避でき、安全な世界に保護される。ここに語りの重要な機能があると論者は主張する。さらに、『シンベリン』にも言及して、このロマンス劇では幽霊の肉体性が希薄化されることを指摘したあと、こうした肉体性の剝奪は一般にロマンス劇では語りの行為において行われるのであると主張する。第三章は、『テンペスト』の主人公プロスペロを語りの行為を実行する人物として注目し、ジェイムズ王の詩“Ane Metaphoricall Invention of a Tragedie Called Phoenix”（1584）に登場する Phoenix と同一視できる存在にあることを前提にして、プロスペロは、自らの物語を語ることができる立場にありながら、ドラマの世界では他の登場人物たちの「カウンター・ナラティヴ」の攻撃を受けて、この物語る力を確信できない不安に陥っていると主張する。そして物語ることによる再生の治癒力を持ち得ないままの人物としてプロスペロを位置づける。第四章は、ロマンスを

材源にもつ『二人の貴公子』を取り上げて、語りがそれを行使する者の肉体性と深く関わり、病いとして捉えられるものであることをテクストを詳細に読み解くことを通して検証している。第五章は、『終わりよければすべてよし』における語りを問題に取り上げて、このドラマは、シェイクスピアにあってはロマンス劇以前に発表された作品でありながら、すでに語りへの関心が現われているがゆえに、ロマンス劇への転換点、また回帰点にあることを検証している。最後に、語りは、シェイクスピアのロマンス劇のテーマである和解と赦しの展開に深く関わる劇的要素であることを示唆して、結論は締めくくられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、シェイクスピアの晩年に発表されたロマンス劇の作品群を取り上げ、そのジャンルの重要な特質として「語り」が前景化されている事実に注目し、劇的世界におけるこの語りの機能を考察した新鮮な視点からの研究である。ドラマにおいて、語りの機能を果たす役割を荷なったもの、あるいは「語り手」の存在は、古くはギリシア悲劇に登場するコーラスに特定できるものであろうが、そうした機能をシェイクスピアのロマンス劇のなかに探ろうとする研究はきわめて意欲的なものであると言えよう。『ペリクリーズ』と『冬物語』における語りの多義的機能への考察は、これらの劇テクストの新たな読みの提示に繋がっている。『テンペスト』をジェイムズ王の詩“Phoenix”と関連づけ、テクストの綿密な読みを通しての比較対照的研究は、論者におけるシェイクスピア劇への深い読みとイギリス・ルネサンス文学への広範な視野からの洞察の証しを物語るものであろう。また、『二人の貴公子』と『終わりよければすべてよし』を論じた研究は、語りの機能をセクシュアリティとの関わりの中で探った、今日的な関心にもとづいた興味深い考察である。

本論文は、このような優れた研究成果であるにもかかわらず、問題点がないわけではない。まず、「語り」の概念が必ずしも明確であるとは言えず、語りが登場人物、台詞の次元、あるいはそれ以外の劇的要素において展開するのか、論のどこかで明確に整理しておくことが望まれよう。また、ナラティヴ、ナレイション、ストリーテリング、ディスコース、カウンター・ナラティヴなどの用語の輪郭が不鮮明のまま使用されたり、論の展開がときにいくらか舌足らずになる傾向があるのも気になるところである。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士、（文学）の学位にふさわしいものと認定する。